

# じんけん瓦版

第 65 号

発行日：2017 年 3 月 5 日

発行：日本聖公会東京教区 人権委員会

第 21 回世界エイズ・デー記念礼拝（2016 年 12 月 4 日）メッセージ

## 命の存在

日本基督教団聖蹟桜ヶ丘教会牧師 八木靖之

あれは、かれこれもう十何年も前のことです。ある日、一人の友人が私に向かって、自分が HIV ポジティブであるということを告げてくれました。それまでは、特になんでもない他愛の無い話をしていたのですが、その中で突然、本当に何気なく、まるで普通のことのように、その友人は自分のことを話してくれました。話を聞いている最中、いろんな思いが一気に私の頭の中を駆け巡りました。たぶん、私はそのとき、少なからず動揺してしまっていたのだと思います。でも同時に、動揺していることを相手に悟られないようにしなければと、咄嗟に考えて、平静を装い、その友人の言葉を受け止めた「振り」を、私はそのときしてしまったように思います。「そっか、それは大変だったね」と一言口にするのが精一杯で、ほかにどんな言葉をかけたらいいか全く見当が付きませんでした。もし下手なことを言って、かえって深く傷付けてしまったらどうしよう、とか、私なんかそんな大事なことを聞いてしまっているんだらうか、とか、そもそも、なぜ敢えて私に話そうと思ったんだらう、といったような不安や疑問が頭の中でぐるぐると回転するばかりで、この状況にふさわしいと思える言葉というものが、結局一言も見つかりませんでした。慰めの言葉や励ましの言葉は、どちらも「何か違う」ような気がしました。また、私にはそんな言葉をかけられるような資格も無い、と思いました。なににせよ、偉そうなことを言える立場でもない、と思いました。

けれど、そうして話を聞きながら、内心いっぱいいっぱいになりつつも、ふと、「彼のためにいま自分が出来ることは何だろう・・・」と一生懸命に考えている自分がいることに気がしました。これは、私にとっては思ってもみないことでした。なぜなら、正直に申し

上げますが、私は当時、HIV/AIDS について、できることならあまり触れたくない、直視したくない、と心の中では思っていたからです。だから、そうすることがとても怖かった。色んな情報を目にしたり、耳にしたりする機会があっても、心の中では、それらを避けて通ることばかり考えていました。それはなぜかと言えば、私自身にとっても、感染する可能性は十分にあるということだけは分かっていたからです。いま振り返れば、そのようなことを恐れるあまり、HIV/AIDS についての情報はもちろん、実際には知らないだけで、本当は自分の周りにも身近に存在している彼のような人たちのことも、無意識的にはありますが、結果としてはずっと避けて生きていたのだと思います。それだけに、この一人の友人からの突然の告白は、そんな恐れという殻の中にいた私にとっては、まるで予想外の不意打ちに近いものでありました。

しかし、そうであるにも関わらず、いざ、こうして彼の言葉、いや、彼自身の告げる言葉を聞いたとき、その瞬間、私は「目の前にいる彼のために自分には果たして何が出来るだろう」ということをすぐに、そして、はや真剣に考え始めていました。これは私にとって、予想もしなかったことでした。それは全くもって、まさしく彼のその告白によって起こされた奇蹟でした。彼の、彼自身の存在の根源から発せられたであろうその言葉が、私の恐れと不安とで冷たく閉ざされかけていた心を、見事に砕いてくれたのです。そして、この経験はさらに、一つの、本当に大切なことを私に悟らせてくれました。その大切なこと、それは、「ここにあるのは、人間の存在なのだ」という事実でした。生きている人間の存在がここにある、ということに、私はようやく目が開かされたのです。

友人が自分のことを話してくれたとき、私は、そこに、一人の「生きている生身の人間」を確かに見ることができました。いま目の前にいるのは、「恐ろしい病いの影」などではなく、生きている、血の通った「人間」であるということ。目の前にいるのは、決して、間違っても、恐れや不安の対象などではないということ。それまでと変わらない親しい一人の友に他ならないのだということ。たとえ難しい病を得ているのだとしても、そこに存在しているのは、かけがえのない一人の人間であって、そこに何ら変わりはないのだという、本当にごくあたりまえの事実、はじめて気付かされたのです。

さて、かつて巷では、とにかく病気の恐ろしさばかりを強調することで、予防を呼びかけるといったことが盛んになされていた時期がありました。キャンペーンとはいえ、このような仕方ではアピールするのは、あまりにも配慮の無いことと言わざるを得ません。また、もしかすると、いまなお私たちの間には、そこで生きている人々がいることに全く気付かず、誤解や思い込みや一方的な決め付けだけで全てを判断しようとしてしまう危険が潜んではいないでしょうか。しかし、それでは、恐怖心や不安感がより煽られるばかりか、実際に病とともに生きている人々の存在、そのかけがえのない存在そのものまでもが、ますます、見えないものとされ、遠ざけられてしまうこととなるのではないのでしょうか。実際のことを何も知らずに、ただ誤解や偏見だけで全て片付けてしまうとするならば、それは、そこで一生懸命に生きている人々の「命」を、まるで無いもののようにしてしまうのと同じことです。

主イエスは、「隣人を愛しなさい」と言われました。しかも、それこそが「最も大切な掟である」とさえ告げられました。隣人とは誰か、と問うならば、それは、もはや言うまでもなく、すべての隣り人が私たちの愛すべき隣人です。隣人というのは、私たちが捜したり選んだりするようなものではありません。逆に、むしろ、私たち自身がまず、傍らにいる人の「隣人となる」ことがもとめられているのです。それが主イエスの示された愛の掟です。私たちは、その隣人の存在に、果たして本当に気付いているのでしょうか。また、すぐ側にいるはずの「見えない隣人」にも、私たちは心を向けているのでしょうか。主イエスが本当に、「愛しなさい」と命じられたのは、実のところ、むしろ、この「見え

ない隣人」のことなのではないかと思うのです。先ほどお読みいただいた御言葉の中で、主イエスは、このように仰っています。

「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」終末の時、王なる主イエスは、人々に向かってこのように告げられると言うのです。それまでの様々な配慮や奉仕や献身について、一つひとつ挙げて思い起こされるご様子が示されています。

しかし、それに対して、正しい人々は、それは私たちには覚えがないことですよと言って、正直にこう答えます。「主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お尋ねしたのでしょうか・・・。」ここに出て来る人々が、実際に飢えている人に食べさせたり、飲ませたり、宿を貸したり、着せたり、見舞ったり、訪ねたりしたことは確かなようです。しかし、このやり取りから、彼らは、その相手が「主イエスだから」ということで、特別にこのような行ないをしたのではないことが分かります。全くそうではないのです。それどころか、誰からも相手にされない人々、社会的に追いやられている人々、虐げられ苦しんでいる人々、つまり、この世ではその命が軽んじられている人たちをこそ、彼らは見つめ、その命の尊さを認め、隣人となって支えたのだということなのです。それは、華やかな表舞台では決して見ることの無い、出会うことの無い、まさに「見えない隣人」と連なることを意味します。そして、その中心は、「命」を見つめること、「命」を支えることであるといえるでしょう。そこに「命」がある。ここにも「命」がある。どんなところであっても、「命」がある限り、そこには必ず主イエスが共におられるのです。

「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」まさに、愛とは命を見つめることです。それはキリストが私たちに託された、最も大切な使命なのです。

## 「東京同宗連」研修会＜世良田村事件・足尾鉍毒事件＞に参加して

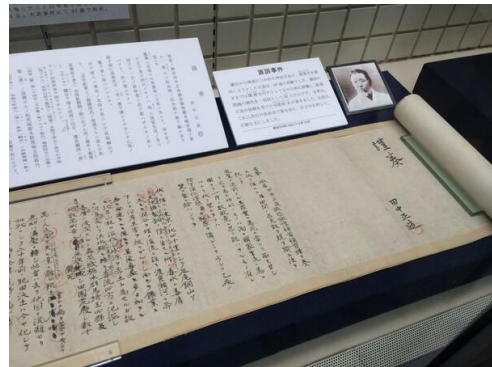
葛飾茨十字教会 佐々木國夫

「東京同宗連」は、「同和問題」にとりくむ宗教教団東京地区連帯会議の略称です。同和問題だけにとどまらず広く人権問題への視野を開いて年に1回研修会を開催している。2016年12月19日－20日に実施された、世良田村事件・足尾鉍毒事件研修に参加した。

初日、参加者9教団から19名、巣鴨駅前からマイクロバスで出発、午後、世良田行政センター（群馬県太田市）に着き、部落史研究者松島一心さんから、世良田村事件についてお話を聞いた。1924年12月末、世良田村の村人が「俺はボロを着ていても、チョウリン坊ではない」などと操りかえし放言する差別事件がおき、水平社が結成されていた同地では、村人への糾弾が行われた。村人はいったんはその非を詫び、謝罪講演会をひらくことを約束したが、村の有力者がこれに反対、村民を煽動し数千人で被差別部落を襲撃した。家屋が破壊され、家具は焼かれ、負傷者12人、襲撃されたのは水平活動家の家だった。差別に立ち上がった部落の人たちに対する計画的な襲撃だった。襲撃した世良田村の人たちと互いに複雑な思いで生活してきた中で事実と違う話もあることから、真実をきちんと残してゆくために研究を始めたそう。事件だけでなく厳しい部落差別とたたかった村の歴史、さまざまな文化に係わってきた村の誇りある歴史をまとめ、行政のパンフレットも作られていた。また、村で作っていた織物産業に欠かせない「箴（おさ）」、弾左衛門手形、大相撲興行の契約書などの貴重な史料を見せてもらった。お話の後、襲撃事件の場所、襲撃の際合図に使われた普門寺梵鐘、江戸時代に弱い立場の女性を護り離縁の目的を貫かせた縁切寺満徳寺なども案内して下さった。

二日目、「公害の原点」と呼ばれる栃木県・足尾銅山の鉍毒事件で、被害者救済に半生をささげた政治家、田中正造にスポットを当てたフィールドワークを行った。明治天皇に渡そうとして果たせなかった直訴状が、佐野市郷土博物館に展示され

ていた。2014年6月、天皇が私的に同館を訪問、直前まで赤字で加筆、修正された直訴状を熱心に見つめていたとの館長の説明があった。館林市では、郷土の偉人の田中正造を教材に用いているそ



直訴状

うだ。館林出身の皇后の薦めがあったのか？113年後にようやく届いた直訴状、ひ孫の天皇は当時の国策をどう感じたのだろうか。

直訴事件後、盛り上がる世論を鎮めるため、国は鉍毒を沈殿させる名目で最下流の旧谷中村に遊水地建設を計画した。正造は谷中村に移り住み、最後まで住民と共に反対運動を展開したが、村は強制的に破壊され、遠くは北海道へ移住を余儀なくされたそう。私財を運動に投じた正造の全財産は、最後無一文になり、亡くなった時の唯一の所持品、新約聖書マタイ伝と大日本帝国憲法、日記帳が展示されていた。死の間際に「見舞客が大勢来ているようだが、うれしくも何ともない。正造に同情してくれるか知らないが、正造の事業に同情して来ている者は一人もない」と言い残したという。また、「俺の書いたものをみるな。俺がやってきた行為を見よ！」とも言ったという。

福島原発事故は、100余年前の鉍毒事件と酷似している。加害企業が政府の庇護下にあることと、鉍毒と放射能とは全く違うものの、目に見えない物質による恐怖の中に生きていかなければならない市民の生活は、今も福島県民を苦しめている。

NPO 法人足尾鉍毒事件田中正造記念館に朝日新聞の天声人語の切抜きが掲示されていた。『時の流れに色あせてしまう偉人もいれば、いよいよ輝

きを増す傑物もいる。田中正造は後者である。公害の原点とされる栃木県・足尾銅山の鉱毒事件で民衆の先頭に立ち闘った。＜真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし＞という至言を残して没し、きょうで100年になる▼明治の半ば、鉱毒は清流を死の川に変え、山や田畑を枯らした。しかし銅は国の経済を支える産品で、政府は人を救うより富国強兵を優先した。そのさまは昭和の水俣病、今の原発にも重なってくる▼衆院議員だった正造は議会で質問を繰り返す。運動を組織し、死罪を覚悟で天皇に直訴した。官憲に抗し、幾多の妨害を受けつつ人々を引っ張った。不撓不屈の四文字が、これほど似合う人はまれだ▼正造を高く買っていた勝海舟が、冗談ながら、この者は末は総理大臣だという証文

を、閻魔様や地藏様あてに書いたという逸話が残る。原発事故のあと正造が総理だったら、困っている人、弱い立場の人を、何をおいても助けるに違いない▼現実の総理は、早々と終息宣言を出し（民主）、経済のためには再稼働が必要と唱え（自民）、なお15万人にのぼる避難は忘れられがちだ。事故処理より外国への原発セールスに熱心というのでは、ことの順番が違う▼冒頭の「真の文明は」の後には、こうした文が続いている。＜……今文明は虚偽虚飾なり、私慾なり、露骨的強盗なり＞。1世紀が流れて、古びないのがやりきれない。（2014.3.14）』

「少しでも人の命に害があるものを、少しぐらいは良いというな」、田中正造の言葉が心に突き刺さる研修会であった。

~~~~~

## 人権週間企画 食肉市場 芝浦と場見学会

食肉処理に従事する人々に対する人権侵害が根強く残っています。

江戸時代以前にはと畜解体の仕事が同和問題と深く係わってきたという歴史や、食肉や「と場」に対する「ケガレ意識」などの誤った観念から、食肉市場で働く人に対する強い偏見・差別が残されている現実があります。

今回、食肉市場・芝浦と場見学会を企画しました。と場の歴史と人権を学び、と畜から解体までの工程を間近に見学します。

- ・日程： 1日目 5月30日(火)14:00-16:00 事前学習会  
2日目 5月31日(水)8:15-12:00 と場見学  
(昼食・休憩)  
14:00-16:00 事後学習会

- ・場所：東京都中央卸売市場食肉市場(芝浦と場)(品川駅東口前)  
(東京都港区港南 2-7-19 電話：03-5479-0651)

- ・参加費：無料 (交通費、昼食等は自己負担)  
先着15名まで(主催者側で2日間の参加を条件としています。1日のみの参加はできません。)

＜問合せ・申込み先＞ 日本聖公会東京教区人権委員会 (佐々木國夫)

e-mail : [k-sasaki4539@fd6.so-net.ne.jp](mailto:k-sasaki4539@fd6.so-net.ne.jp) TEL : 090-8593-6129

### 守大助さんに手紙を

仙台北陵クリニックえん罪事件で、再審請求を戦っている守大助さんに ひとこと励ましのメッセージを送ってください。

[宛先] 〒264-8585

千葉県千葉市若葉区貝塚町 192

桜

今年の春は 満開の桜に祈った

「再審無罪」という花を

一日でも早く 咲かせて下さいと

(守大助さんの塀の中の詩)